

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日

Date of Application:

2002年 7月18日

出 願 番 号

Application Number:

特願2002-210115

[ST.10/C]:

[JP 2002-210115]

出 願 人

Applicant(s):

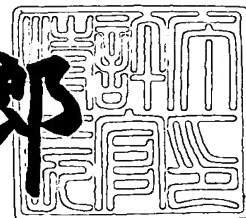
富士写真フイルム株式会社

Hiroaki HYUGA Q76382
EXPOSURE DEVICE
Filing Date: July 11, 2003
Darryl Mexic 202-293-7060
(3)

2003年 6月 6日

特 許 庁 長 官
Commissioner,
Japan Patent Office

太田信一郎



出証番号 出証特2003-3044309

【書類名】 特許願

【整理番号】 FSP-03896

【提出日】 平成14年 7月18日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 H05B 33/00

【発明者】

 【住所又は居所】 神奈川県足柄上郡開成町宮台798番地 富士写真フイルム株式会社内

 【氏名】 日向 浩彰

【特許出願人】

 【識別番号】 000005201

 【氏名又は名称】 富士写真フイルム株式会社

【代理人】

 【識別番号】 100079049

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 中島 淳

 【電話番号】 03-3357-5171

【選任した代理人】

 【識別番号】 100084995

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 加藤 和詳

 【電話番号】 03-3357-5171

【選任した代理人】

 【識別番号】 100085279

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 西元 勝一

 【電話番号】 03-3357-5171

【選任した代理人】

 【識別番号】 100099025

【弁理士】

【氏名又は名称】 福田 浩志

【電話番号】 03-3357-5171

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 006839

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9800120

【ブルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 露光装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 感光材料を露光する露光装置であって、

複数の陰極と複数の陽極とが格子状に配列され且つ陰極配列方向又は陽極配列方向に沿って複数の領域に分割されたマトリックス電極と、該マトリックス電極の交差部に設けられた発光素子と、を備えた発光素子アレイと、

分割された領域毎に、前記陰極と前記陽極との間に電圧を印加して、該領域のマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子を点灯するように独立に駆動する駆動手段と、

を備えた露光装置。

【請求項 2】 前記発光素子アレイは、発光スペクトルが異なる複数種類の発光素子を備えた請求項 1 に記載の露光装置。

【請求項 3】 前記マトリックス電極は、前記交差部に前記複数種類の発光素子の中で感光材料の感度が最も低い発光スペクトルの光を発光する発光素子が設けられた領域とそれ以外の領域とに分割された請求項 2 に記載の露光装置。

【請求項 4】 前記複数種類の発光素子を、前記感光材料との関係でフルカラーの画像を形成可能な発光スペクトルを備えた赤色、緑色、及び青色の 3 種類の発光素子とした請求項 2 又は 3 に記載の露光装置。

【請求項 5】 ハロゲン化銀感光材料を露光する露光装置であって、

複数の陰極と複数の陽極とが格子状に配列され且つ陰極配列方向又は陽極配列方向に沿って複数の領域に分割されたマトリックス電極と、該マトリックス電極の交差部に設けられた赤色、緑色、及び青色の 3 種類の発光素子と、を備え、前記マトリックス電極の所定分割領域の交差部に感光材料の感度が最も低い赤色の発光素子を設け、他の分割領域の交差部に緑色及び青色の発光素子を設けた発光素子アレイと、

分割された領域毎に、前記陰極と前記陽極との間に電圧を印加して、該領域のマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子を点灯するように独立に駆動する駆動手段と、

を備えた露光装置。

【請求項 6】 前記発光素子を有機 E L 素子とした請求項 1 乃至 5 の何れか 1 項に記載の露光装置。

【発明の詳細な説明】

【 0 0 0 1 】

【発明の属する技術分野】

本発明は、露光装置に関し、特に、マトリクス電極の交差部に設けられた複数の発光素子を備えた露光装置に関する。

【 0 0 0 2 】

【従来の技術】

蛍光性の有機物質を発光層に用いた有機 E L (エレクトロ・ルミネッセント) 素子は、他の発光素子に比べて製造が容易であり、薄型かつ軽量の発光素子が構成できる等の利点により、従来、薄型ディスプレイ用素子として研究開発が進められてきた。近年では、発光輝度、発光効率、耐久性等の点でも発光ダイオード (L E D) に匹敵する高性能の有機 E L 素子が得られていることから、ハロゲン化銀感光体等の感光材料を露光する露光装置への応用が検討されている。

【 0 0 0 3 】

例えば、特開 2 0 0 0 - 1 0 3 1 1 4 号公報等には、有機 E L 素子を用いた露光装置が記載されている。この露光装置は、図 8 に示すように、赤色 (R)、緑色 (G)、青色 (B) の各色に発光する有機 E L 素子 8 0 を各色毎に主走査方向に複数配列して形成された素子列を、R G B 3 色 1 組として副走査方向に複数組 (図 8 では 2 組) 並べたものである。なお、図 8 では、R G B 各色の有機 E L 素子 8 0 を区別するために符号末尾に対応する色を示すアルファベット (R / G / B) を付して示している。

【 0 0 0 4 】

この露光装置では、1 回の副走査により、R G B 各色の光は感光材料の同一位置に 1 回ずつ照射され、感光材料にはフルカラーの画像潜像が形成される。また、縦横に交差したマトリックス電極の交点部に各発光素子を形成する場合には、従来、R G B 各色の素子列に 1 本の陰極ラインを割り当てると共に、各陰極ライ

ンを時分割順次走査して、各発光素子をパッシブ・マトリックス駆動するのが通常であった。

【0005】

更に、各有機EL素子の発光強度や発光時間は、図示しない制御回路により制御されており、RGB各色毎に所定の露光階調が実現されている。例えば、各色毎にm段階の露光階調が可能であるとする、この露光装置の発色発現可能数は m^3 通りとなる。従って、多彩な発色を可能とするためには、この露光階調数mを大きくする必要がある。例えば、パルス幅変調方式やパルス数変調方式による露光制御において露光階調数を大きくするためには、最小パルス時間幅をより小さくする必要がある。

【0006】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、感光材料は各色の光に対して感度が異なるため、感度の低い色についてはより高い発光強度で露光する必要がある、その場合、高い発光強度が要求される色の発光素子の寿命が、他の色の発光素子に比較して特に短くなる問題があった。露光装置の寿命は最も寿命が短い発光素子により律速される。感光材料がハロゲン化銀感光材料である場合には、赤色光に対しての感度が緑色光や青色光に対する感度に比較して1桁以上低いため、赤色の発光素子の発光強度を高くしなければならない。このため、赤色の発光素子の寿命が短くなり、露光ヘッドの寿命も短くなるという問題があった。

【0007】

本発明は上記の問題点に鑑み成されたものであり、本発明の目的は、信頼性に優れた露光装置を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】

上記目的を達成するために本発明の露光装置は、感光材料を露光する露光装置であって、複数の陰極と複数の陽極とが格子状に配列され且つ陰極配列方向又は陽極配列方向に沿って複数の領域に分割されたマトリックス電極と、該マトリックス電極の交差部に設けられた発光素子と、を備えた発光素子アレイと、分割され

た領域毎に、前記陰極と前記陽極との間に電圧を印加して、該領域のマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子を点灯するように独立に駆動する駆動手段と、を備えたことを特徴とする。

【0009】

発光素子アレイが、複数の陰極と複数の陽極とが格子状に配列されたマトリックス電極と、このマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子と、を備えて構成されている場合には、発光素子アレイのマトリックス電極を陰極配列方向又は陽極配列方向に沿って複数の領域に分割すると共に、駆動手段により、分割された領域毎に、前記陰極と前記陽極との間に電圧を印加して、該領域のマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子を点灯するように独立に駆動する。

【0010】

マトリックス電極を複数の領域に分割して、各領域毎に、前記陰極と前記陽極との間に電圧を印加して、該領域のマトリックス電極の交差部に設けられた発光素子を点灯するように独立に駆動（例えば、パッシブ・マトリックス駆動）することで、発光素子群全体を駆動する場合と比較すると、1本の陰極又は1本の陽極当りに割り当てられる発光素子数が減少し、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下する。これにより、露光装置の信頼性が向上する。

【0011】

なお、駆動デューティとは、発光素子をパルス駆動した場合のパルス繰り返し周期 T に対するパルス幅 t の割合 t/T である。駆動デューティが向上することにより露光効率が向上するので、各発光素子のピーク発光強度を低下することができる。

【0012】

特に、露光装置が発光スペクトルが異なる複数種類の発光素子を備えている場合には、前記マトリックス電極を、交差部に複数種類の発光素子の中で感光材料の感度が最も低い（発光スペクトルの光を発光する）発光素子が設けられた領域と、それ以外の領域とに分割するのが好ましい。この場合には、感度が最も低い発光素子のピーク発光強度が低下することで、より信頼性が向上する。

【0013】

また、複数種類の発光素子を有する露光装置において、複数種類の発光素子の中で感光材料の感度が最も低い発光素子を配列した素子列の行数を、他の種類の発光素子を配列した各素子列のいずれの行数よりも多くすることが好ましい。感光材料の感度が最も低い発光素子の発光強度（時間平均）を低減でき、露光装置の信頼性が向上する。

【 0 0 1 4 】

また、複数種類の発光素子を、感光材料との関係でフルカラーの画像を形成可能な発光スペクトルを備えた 3 種類の発光素子とすることができる。例えば、赤色光を発光する赤色の発光素子、緑色光を発光する緑色の発光素子、及び青色光を発光する青色の発光素子の 3 種類の発光素子とすることができる。これにより、フルカラーの画像（潜像）を形成することができる。

【 0 0 1 5 】

上記の露光装置において、発光素子としては、アレイ化が容易な有機 EL 素子が好ましい。有機 EL 素子は、真空蒸着の外、塗布、インクジェット法等を用いることにより単一基板上に多数形成することが容易である。上記の露光装置において発光素子として有機 EL 素子を使用した場合には、露光装置の生産性を向上することができると同時に、個々の発光素子の配置位置を調整する手間が省け、配置位置を高精度に維持できるというメリットがある。また、各発光素子は、発光強度及び露光時間の少なくとも一方を変調して露光階調を制御することにより、 m_i ($i = 1 \sim p$) 段階の露光階調制御が可能となる。

【 0 0 1 6 】

なお、本発明の露光装置は、ハロゲン化銀カラー感光材料の露光装置として好適である。階調表現性、階調再現性に優れるハロゲン化銀カラー感光材料を用いることで、本発明の露光装置により実現される高露光階調数を、感光材料において忠実に再現することができる。

【 0 0 1 7 】

感光材料としてハロゲン化銀感光材料を用いる場合には、赤色、緑色、及び青色の 3 種類の発光素子を用いてフルカラー画像を形成することができるが、発光素子アレイのマトリックス電極の所定分割領域の交差部に感光材料の感度が最も

低い赤色の発光素子を設けると共に、他の分割領域の交差部に緑色及び青色の発光素子を設けることが好ましい。

【 0 0 1 8 】

【発明の実施の形態】

以下、図面を参照して本発明の実施の形態を詳細に説明する。

(第 1 の実施の形態)

[露光装置の構成]

本発明の実施の形態に係る露光装置は、図 1 に示すように、透明基板 1 0 と、透明基板 1 0 上に形成され且つ R G B 色の何れかの色で発光する複数の発光部（以下、便宜上、各発光部を「発光素子」という）を備えた有機 E L アレイ 2 0 と、有機 E L アレイ 2 0 の各発光素子からの光を集光して感光材料 4 0 に照射するセルフオックレンズアレイ（以下、「S L A」という）3 0 と、透明基板 1 0 及び S L A 3 0 を支持する支持体 5 0 とを備えている。

【 0 0 1 9 】

有機 E L アレイ 2 0 は、透明基板 1 0 上に、陽極としての透明電極 2 1、発光層を含む有機化合物層 2 2、陰極としての金属電極 2 3 が順次積層されて形成されている。透明電極 2 1 及び金属電極 2 3 は、透明電極 2 1 のライン（陽極ライン）と金属電極 2 3 のライン（陰極ライン）とが発光素子の配置レイアウトに応じて交差するように、各々ライン状にパターンニングされている。

【 0 0 2 0 】

この有機 E L アレイ 2 0 は、例えばステンレス製缶等の封止部材 6 0 により覆われており、封止部材 6 0 の縁部と透明基板 1 0 とが接着剤により接着されて、乾燥窒素ガスで置換された封止部材 6 0 内に封止されている。この有機 E L アレイ 2 0 の透明電極 2 1 と金属電極 2 3 との間に所定電流が注入されると、陽極ラインと陰極ラインとの交差点に在る有機化合物層 2 2 に含まれる発光層が発光し、発光光が透明電極 2 1 及び透明基板 1 0 を介して取り出される。

【 0 0 2 1 】

また、透明電極 2 1 と金属電極 2 3 の両電極は、複数の発光素子の各々を独立に駆動（パッシブ・マトリックス駆動）する駆動回路 8 0 に接続されている。こ

の駆動回路 8 0 は、両電極間に電圧を印加する電源（図示せず）及びトランジスタやサイリスタで構成されたスイッチング素子（図示せず）を含んで構成されている。

【 0 0 2 2 】

上記の駆動回路 8 0 は、各発光素子の発光強度及び発光時間の少なくとも一方を変更して素子毎に m 段階の露光階調が可能となるように、制御部 9 0 により制御される。即ち、パルス幅変調、パルス数変調、強度変調等により、各発光素子の変調駆動される。

【 0 0 2 3 】

透明基板 1 0 は、発光光に対して透明な基板であり、ガラス基板、プラスチック基板等を用いることができる。また、透明基板 1 0 には、一般的な基板特性として、耐熱性、寸法安定性、耐溶剤性、電気絶縁性、加工性、低通気性、低吸湿性等が要求される。

【 0 0 2 4 】

透明電極（陽極） 2 1 は、4 0 0 n m ～ 7 0 0 n m の可視光の波長領域において、少なくとも 5 0 % 以上、好ましくは 7 0 % 以上の光透過率を有するものが好ましい。透明電極 2 1 を構成するための材料としては、酸化錫、酸化錫インジウム（ITO）、酸化亜鉛インジウムなどの透明電極材料として公知の化合物の他、金や白金など仕事関数が高い金属の薄膜を用いてもよい。また、ポリアニリン、ポリチオフェン、ポリピロールまたはこれらの誘導体などの有機化合物でもよい。透明導電膜については、沢田豊監修「透明導電膜の新展開」シーエムシー刊（1 9 9 9 年）に詳細に記載されており、本発明に適用することができる。また、透明電極 2 1 は、真空蒸着法、スパッタリング法、イオンプレーティング法などにより、透明基板 1 0 上に形成することができる。

【 0 0 2 5 】

有機化合物層 2 2 は、発光層のみからなる単層構造であってもよいし、発光層の外に、ホール注入層、ホール輸送層、電子注入層、電子輸送層等のその他の層を適宜有する積層構造であってもよい。有機化合物層 2 2 の具体的な構成（電極を含めて表示する）としては、陽極／ホール注入層／ホール輸送層／発光層／電

子輸送層／陰極、陽極／発光層／電子輸送層／陰極、陽極／ホール輸送層／発光層／電子輸送層／陰極、などが挙げられる。また、発光層、ホール輸送層、ホール注入層、電子注入層を複数層設けてもよい。

【 0 0 2 6 】

有機ELアレイ 2 0 は、有機化合物層の材料に応じた色で発光する。従って、発光素子毎に有機化合物層の材料を塗り分けることにより、RGB色の何れかの色で発光する複数の発光素子を備えた有機ELアレイ 2 0 を得ることができる。ホール輸送層、電子輸送層、発光層および導電性高分子層などの有機化合物層の各構成層には、従来公知の材料を適宜用いることができる。また、各構成層は、真空蒸着法、スパッタ法、ディッピング法、スピンコーティング法、キャスト法、バーコート法、ロールコート法等、公知の方法を用いて形成することができる。また、溶媒を使い分けることにより多層塗布も可能である。

【 0 0 2 7 】

金属電極（陰極） 2 3 は、仕事関数の低いLi、Kなどのアルカリ金属、Mg、Caなどのアルカリ土類金属、及びこれらの金属とAgやAlなどとの合金や混合物等の金属材料から形成されるのが好ましい。陰極における保存安定性と電子注入性とを両立させるために、上記材料で形成した電極を、仕事関数が大きく導電性の高いAg、Al、Auなどで更に被覆してもよい。なお、金属電極 2 3 も透明電極 2 1 と同様に、真空蒸着法、スパッタ法、イオンプレーティング法などの公知の方法で形成することができる。また、金属電極 2 3 を透明電極 2 1 と同様に透明導電膜で構成することもできる。

【 0 0 2 8 】

SLA 3 0 は、複数のセルフオックレンズ 3 1 で構成されている。セルフオックレンズ 3 1 は、断面の半径方向に屈折率分布をもつ棒状の厚肉レンズである。セルフオックレンズ 3 1 に入射された光は、光軸に対して正弦波状に蛇行しながら進行し、感光材料 4 0 表面上で結像して露光スポット 7 0 を結ぶように感光材料 4 0 に向けて出力される。

【 0 0 2 9 】

また、露光スポットを絞り、光学的クロストークを抑制するために、このセル

フォックレンズ 3 1 の開口部は各有機 E L アレイ 2 0 の各発光領域よりも大きく形成され、且つ隣り合うセルフフォックレンズ 3 1 同士は互いに接するように配列されてされている。なお、セルフフォックレンズ 3 1 は有機 E L アレイ 2 0 の各発光素子と 1 対 1 で対応するように設けてもよいし、副走査方向に並んだ複数の各発光素子に対して 1 つというように、1 対 N (N : 2 以上の整数) で対応するように設けてもよい。

【0 0 3 0】

感光材料 4 0 は、R G B 3 色でのカラー露光が可能であれば、特に制限されない。例えば、感光材料 4 0 としてカラーのハロゲン化銀感光材料を使用することができる。また、感光感熱材料も使用することができる。

【0 0 3 1】

[発光素子の配列]

次に、有機 E L アレイ 2 0 の発光素子の配列について説明する。有機 E L アレイ 2 0 には、図 2 に示すように、赤色 (R 色) に発光する発光素子 2 5 R、緑色 (G 色) に発光する発光素子 2 5 G、及び青色 (B 色) に発光する発光素子 2 5 B が、第 1 のブロック 2 6 と第 2 のブロック 2 7 の 2 ブロックに分けられて、以下に説明するレイアウトで同一基板上にマトリクス状に配列されている。各ブロックについて、各発光素子の配置は単純マトリックス配置とされている。

【0 0 3 2】

有機 E L は、蒸着等の方法により同一基板上に多数の発光素子を形成できる。また、異なる基板上に R G B 各色の発光素子を形成し、これら 3 つのブロックを配列して使用することも可能である。

【0 0 3 3】

まず、第 1 のブロック 2 6 においては、発光素子 2 5 R が主走査方向に所定間隔で複数個配列されて素子列 R を構成し、この素子列 R が副走査方向に複数行配列されている。同様に、発光素子 2 5 G を複数個配列した素子列 G が副走査方向に素子列 R と同数行配列され、発光素子 2 5 B を複数個配列した素子列 B が副走査方向に素子列 R と同数行配列されている。

【0 0 3 4】

例えば、図 2 では、第 1 のブロック 2 6 に、発光素子 2 5 R が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $R_1 \sim R_3$ 、発光素子 2 5 G が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $G_1 \sim G_3$ 、及び発光素子 2 5 B が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $B_1 \sim B_3$ が、副走査方向に R G B の順に配列されている。従って、R G B 各色の発光素子が 3 個ずつ、合計 9 個の発光素子が副走査方向に配列されることになる。

【 0 0 3 5 】

次に、第 2 のブロック 2 7 においては、第 1 のブロック 2 6 と同様に、素子列 R、素子列 G、及び素子列 B の各々が副走査方向に第 1 のブロック 2 6 の素子列 R と同数行ずつ配列されているが、第 2 のブロック 2 7 の各素子列は、第 1 のブロック 2 6 の各素子列から主走査方向に所定間隔ずらして配置されている。これにより、第 1 のブロック 2 6 に配置された発光素子による露光スポット間を、第 2 のブロック 2 7 に配置された発光素子によって露光することができる。

【 0 0 3 6 】

例えば、図 2 では、第 2 のブロック 2 7 に、発光素子 2 5 R が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $R_4 \sim R_6$ 、発光素子 2 5 G が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $G_4 \sim G_6$ 、及び発光素子 2 5 B が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $B_4 \sim B_6$ が、副走査方向に R G B の順に配列されている。従って、第 1 のブロック 2 6 と同様に、R G B 各色の発光素子が 3 個ずつ、合計 9 個の発光素子が副走査方向に配列されることになる。

【 0 0 3 7 】

なお、この例では、多数の発光素子をマトリックス状に配置した複数のブロックを設ける例について説明したが、多数の発光素子を単に千鳥状に配置してもよい。

【 0 0 3 8 】

[多階調露光方法]

次に、上記の露光装置を用いて感光材料を多階調で露光する露光方法について説明する。

【 0 0 3 9 】

感光材料 4 0 が搬送されるのに伴い、有機 E L アレイ 2 0 の発光素子 2 5 R、2 5 G、及び 2 5 B の各々が所定のタイミングで点灯され、副走査方向に配列された R G B 3 色の発光素子により感光材料 4 0 の同一位置が露光（多重露光）される。例えば、図 2 に示す素子配列では、R 色に発光する発光素子 2 5 R で 3 回、G 色に発光する発光素子 2 5 G で 3 回、及び B 色に発光する発光素子 2 5 B で 3 回の合計 9 回の多重露光がなされる。

【 0 0 4 0 】

第 1 のブロック 2 6 及び第 2 のブロック 2 7 の各々は、駆動回路 8 0 により同時独立にパッシブ・マトリックス駆動（デュアル・スキャン）される。パッシブ・マトリックス駆動とは、各陰極ラインを時分割線順次走査し、走査中の陰極ラインと交差する陽極ラインを信号に発光させたい信号に応じて駆動して、走査を全陰極線に順次行き渡らせる駆動方法である。

【 0 0 4 1 】

発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下する。発光素子群を 2 つの領域に分割する場合には、各発光素子の駆動デューティが 2 倍に向上し、ピーク発光強度が半減する。これにより、信頼性が向上する。

【 0 0 4 2 】

また、各発光素子について独立に m 段階の露光階調制御が可能である場合には、各色毎に最大 n 回多重露光すると仮定すると、各色毎にシャドウからハイライトまでを $\{n \times (m - 1) + 1\}$ 段階で表した階調での露光量制御が可能となる。即ち、発光色が同じ場合は、階調数はその発光色で発色する色の濃度の可能数となるので、複数の発光素子で多重露光する場合の可能数は各素子の可能数の和となる。1 素子当り m 段階の露光階調制御が可能である場合、これと同じ発光色の素子 n 個により多重露光されたとすると、最小 0 から最大 $n \times (m - 1)$ までの濃度での露光が可能であり、露光階調数は $\{n \times (m - 1) + 1\}$ となる。一方、発光色が異なる場合は、各色の濃度の組合せで色彩が表現されることになるので、複数色で多重露光する場合の可能数は各色の可能数の積となる。従って、

R G B 3 色毎に n 回多重露光すると仮定すると、 $\{n \times (m - 1) + 1\}^3$ 通りのフルカラーの発色発現（階調表現）が可能になる。

【 0 0 4 3 】

例えば、本実施の形態の有機 E L アレイ 2 0 の各発光素子について 1 回の露光で 8 ビット ($2^8 = 256$) の露光階調制御が可能であるとする、R G B 各色について 3 回露光する場合には、各色毎に 7 6 6 階調の露光量制御が可能となり、 $766^3 = 449455096$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、R G B 各色毎に 1 回ずつ露光する従来の露光装置では発色発現数が $256^3 = 16777216$ 通りであったが、R G B 各色について 3 回ずつ露光する場合には、この約 27 倍もの発色発現数を実現することができる。

【 0 0 4 4 】

図 3 に、露光階調の各発光素子への割り付け例を示す。この例では、1 回の露光で 256 段階の露光階調制御が可能である発光素子を用い、副走査方向に配列された 3 個の R 色の発光素子（R 素子 1、R 素子 2、及び R 素子 3）に着目して、766 段階で表した各階調をこの 3 個の発光素子に略均等に割り付けている。R 素子 1、R 素子 2、及び R 素子 3 の配列順序は任意である。また、G 色の発光素子、B 色の発光素子についても、同様に、露光階調の割り付けを行うことができる。また、図 4 に示すように、露光階調を各発光素子に不均等に割り付けることもできる。

【 0 0 4 5 】

上記の露光階調を略均等に割り付ける露光階調の割り付け方法は、以下の通り一般化することができる。ここでは、R 色について n 個の発光素子による n 回の露光で 766 階調の露光量制御を行い、入力された画像データに基づいて所定画素を露光量 X で露光する場合について説明する。露光量 X は最小露光量単位であり、整数で与えられる。766 階調の露光量制御を行うとすると、露光量 X は 766 階調の各段階に対応して 0 から 765 までの何れかの整数で与えられ、数値が大きくなるほど露光量が増加する。この X 値と n 値とを用いて p 値及び q 値を演算する。下記式に示すように、 p 値は X を n で除算した場合の剰余として与えられる。

【 0 0 4 6 】

【数 1】

$$p = \text{mod}(X, n)$$

【 0 0 4 7 】

また、下記式に示すように、 q 値は X を n で除算した場合の商を 0 に近い整数に丸めた値として与えられる。

【 0 0 4 8 】

【数 2】

$$q = \text{INT}(X / n)$$

【 0 0 4 9 】

そして、 n 個の発光素子の内、任意の p 個には露光量が $(q + 1)$ となるように、残りの $(n - p)$ 個の発光素子には露光量が q となるように、露光階調を割り付けることができる。例えば、露光量 2 4 1 を 3 個の発光素子に割り付ける場合には、 p 値は 1 となり、 q 値は 8 0 となるから、1 個の発光素子には露光量が 8 1 となるように露光階調が割り付けられ、残りの 2 個の発光素子には露光量が 8 0 となるように露光階調が割り付けられる。

【 0 0 5 0 】

上記の方法で割り付けられた露光階調に基づいて n 個の R 色の発光素子の各々により感光材料の同一位置が n 回露光され、各画素毎に決定された露光量 X が与えられる。B 色、G 色についても同様に露光され、R G B 各色毎に画像データに応じた露光量が与えられる。

【 0 0 5 1 】

以上説明した通り、本実施の形態に係る露光装置は、発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎に同時独立にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下するので、露光装置の信頼性が向上する。

【 0 0 5 2 】

また、本実施の形態に係る露光装置は、RGB各色毎に n 個ずつ、合計 $3n$ 個の発光素子が副走査方向に配列された有機ELアレイを備えているので、1回の副走査で、感光材料の同一位置を各色毎に n 回ずつ、合計 $3n$ 回露光することができる。従って、各発光素子について独立に m 段階の露光階調制御が可能である場合には、各色毎に最大 n 回多重露光すると仮定すると、各色毎に $\{n \times (m - 1) + 1\}$ 階調の露光量制御が可能となり、RGB各色毎に n 回多重露光すると仮定すると、 $\{n \times (m - 1) + 1\}^3$ 通りのフルカラーの発色発現（階調表現）が可能になる。即ち、RGB各色毎に1回ずつ露光する従来の露光装置と比べて、各色毎の露光階調数及び発色発現数が飛躍的に増大する。これにより多彩且つ超高精細な色再現、高画質化を達成することができる。

【 0 0 5 3 】

また、階調数を一定とした場合にも、従来の露光装置と比べて、発光素子やこの発光素子を駆動する駆動回路の応答速度の限界を超えて、副走査速度を向上することができる。一方、副走査速度を一定とした場合にも、各発光素子の発光強度を低減できるので、露光装置の信頼性を向上することができる。

【 0 0 5 4 】

更に、面積階調ではなく、露光量を制御する露光階調を採用しているので、空間分解能を犠牲にすることなく、発色発現数を増加させることができる。

【 0 0 5 5 】

（第2の実施の形態）

本実施の形態に係る露光装置は、有機ELアレイ20の発光素子の配列を変更した以外は第1の実施の形態と同様の構成であるため、同じ構成部分に付いては説明を省略し、相違点である発光素子の配列と露光方法とについて説明する。

【 0 0 5 6 】

〔発光素子の配列〕

有機ELアレイ20には、図5に示すように、1枚の基板上に、赤色（R色）に発光する発光素子25R、緑色（G色）に発光する発光素子25G、及び青色（B色）に発光する発光素子25Bが、第1のブロック26Aと第2のブロック

2 7 A の 2 ブロックに分けられて、以下に説明するレイアウトでマトリクス状に配列されている。

【 0 0 5 7 】

まず、第 1 のブロック 2 6 A においては、発光素子 2 5 R が主走査方向に所定間隔で複数個配列されて素子列 R を構成し、この素子列 R が副走査方向に複数 (n_R) 行配列されている。同様に、発光素子 2 5 G を複数個配列した素子列 G が副走査方向に複数 (n_G) 行配列され、発光素子 2 5 B を複数個配列した素子列 B が副走査方向に複数 (n_B) 行配列されている。ここで、素子列 R の配列行数 n_R 、素子列 G の配列行数 n_G 、及び素子列 B の配列行数 n_B の少なくとも 1 つは他の配列行数と異なっている。

【 0 0 5 8 】

素子列 R、素子列 G、及び素子列 B それぞれの配列行数は、感光材料の感度に応じて変更することができる。例えば、感光材料 4 0 としてハロゲン化銀感光材料（カラーペーパー）を使用する場合には、R G B 各色の光に対する感度は、R 色、G 色、B 色の順に高くなる。従って、R G B 各色について配列行数を同じにした場合には、B 色、G 色、R 色の順に発光強度を大きくする必要があるが、この場合は R 色の発光素子の寿命が短くなる問題がある。これに対し、R 色の発光素子の配列行数を、他色の発光素子の配列行数よりも多くすることにより、R 色の発光素子 1 個当りの（時間平均した）発光強度を低減でき、短寿命化の問題を低減することができる。上記のように感度が R 色、G 色、B 色の順に高くなる感光材料を使用する場合には、最も低感度の R 色に最も多くの列数が割り当てられるように、R G B 各色の配列行数を B 色、G 色、R 色の順に増加させるのがより好ましい。

【 0 0 5 9 】

例えば、図 5 では、第 1 のブロック 2 6 A に、発光素子 2 5 R が各々主走査方向に 2 0 個配列された 4 行の素子列 $R_1 \sim R_4$ 、発光素子 2 5 G が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $G_1 \sim G_3$ 、及び発光素子 2 5 B が各々主走査方向に 2 0 個配列された 2 行の素子列 B_1 、 B_2 が、副走査方向に R G B の順に配列されている。従って、副走査方向には、R 色の発光素子が 4 個、G 色の発光素子

が 3 個、B 色の発光素子が 2 個の合計 9 個の発光素子が配列されることになる。

【 0 0 6 0 】

次に、第 2 のブロック 2 7 A には、第 1 のブロック 2 6 A と同様に、 n_R 行の素子列 R、 n_G 行の素子列 G、及び n_B 行の素子列 B の各々が副走査方向に配列されているが、第 2 のブロック 2 7 A の各素子列は、第 1 のブロック 2 6 A の各素子列から主走査方向に所定間隔ずらして配置されている。これにより、第 1 のブロック 2 6 A に配置された発光素子による露光スポット間を、第 2 のブロック 2 7 A に配置された発光素子により露光することができる。

【 0 0 6 1 】

例えば、図 5 では、第 2 のブロック 2 7 A に、発光素子 2 5 R が各々主走査方向に 2 0 個配列された 4 行の素子列 $R_5 \sim R_8$ 、発光素子 2 5 G が各々主走査方向に 2 0 個配列された 3 行の素子列 $G_4 \sim G_6$ 、及び発光素子 2 5 B が各々主走査方向に 2 0 個配列された 2 行の素子列 B_3 、 B_4 が、副走査方向に R G B の順に配列されている。従って、第 1 のブロック 2 6 A と同様に、R 色の発光素子が 4 個、G 色の発光素子が 3 個、B 色の発光素子が 2 個の合計 9 個の発光素子が副走査方向に配列されることになる。

【 0 0 6 2 】

[多階調露光方法]

次に、上記の露光装置を用いて感光材料を多階調で露光する露光方法について説明する。

【 0 0 6 3 】

感光材料 4 0 が搬送されるのに伴い、1 回の副走査で、有機 E L アレイ 2 0 の発光素子 2 5 R、2 5 G、及び 2 5 B の各々が所定のタイミングで点灯され、副走査方向に配列された R G B 3 色の発光素子により感光材料 4 0 の同一位置が露光（多重露光）される。例えば、図 5 に示す素子配列では、R 色に発光する発光素子 2 5 R で 4 回、G 色に発光する発光素子 2 5 G で 3 回、及び B 色に発光する発光素子 2 5 B で 2 回の合計 9 回の多重露光がなされる。

【 0 0 6 4 】

第 1 のブロック 2 6 A 及び第 2 のブロック 2 7 A の各々は、駆動回路により同

時独立にパッシブ・マトリックス駆動される。発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下する。これにより、信頼性が向上する。

【0065】

各色の発光素子について独立に m_i ($i = R, G, B$) 段階の露光階調制御が可能である場合には、各色毎に最大 n_i ($i = R, G, B$) 回多重露光すると仮定すると、各色毎にシャドウからハイライトまでを $\{n_i \times (m_i - 1) + 1\}$ 段階で表した階調での露光量制御が可能となる。上記の通り、 n_i の値は RGB 3色について同じ値とはならないが、 m_i の値は RGB 3色について同じ値でも良く、異なる値でも良い。

【0066】

例えば、図6に示すように、RGB各色について露光階調数 $\{n_i \times (m_i - 1) + 1\}$ が同じ値となるように、 n_i の値に応じて m_i の値を設定することができる。従って、RGB 3色で多重露光すると、 $\{n_i \times (m_i - 1) + 1\}^3$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。

【0067】

図6に示す例では、1回の露光で256段階の露光階調制御が可能なR色の発光素子25Rで4回露光し、1回の露光で341段階の露光階調制御が可能なG色の発光素子25Gで3回露光し、1回の露光で511段階の露光階調制御が可能なB色の発光素子25Bで2回露光するので、各色毎に1021階調の露光量制御が可能となり、 $1021^3 = 1064332261$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、この場合には、RGB 3色毎に1回ずつ露光する従来の露光装置の約63倍もの発色発現数を実現することができる。

【0068】

また、図7に示すように、RGB各色について露光階調数 $\{n_i \times (m_i - 1) + 1\}$ は必ずしも一致する必要は無い。R色については $\{n_R \times (m_R - 1) + 1\}$ 階調、G色については $\{n_G \times (m_G - 1) + 1\}$ 階調、B色については $\{n_B \times (m_B - 1) + 1\}$ 階調の露光量制御が可能となる場合には、RGB各色で多

重露光すると、 $\{n_R \times (m_R - 1) + 1\} \cdot \{n_G \times (m_G - 1) + 1\} \cdot \{n_B \times (m_B - 1) + 1\}$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。

【 0 0 6 9 】

図 7 に示す例では、1 回の露光で 2 5 6 段階の露光階調制御が可能な R 色の発光素子 2 5 R で 4 回露光し、1 回の露光で 5 1 2 段階の露光階調制御が可能な G 色の発光素子 2 5 G で 3 回露光し、1 回の露光で 5 1 2 段階の露光階調制御が可能な B 色の発光素子 2 5 B で 2 回露光するので、R 色については 1 0 2 1 階調、B 色については 1 5 3 4 階調、B 色については 1 0 2 3 階調の露光量制御が可能となり、 $1 0 2 1 \times 1 5 3 4 \times 1 0 2 3 = 1 6 0 2 2 3 6 9 2 2$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、この場合には、R G B 3 色毎に 1 回ずつ露光する従来の露光装置の約 9 6 倍もの発色発現数を実現することができる。

【 0 0 7 0 】

グレーを表現する場合には、R G B 3 色の露光により銀塩感光材料が発色する、それぞれ C (シアン)、M (マゼンタ)、Y (イエロー) の色濃度が実質的に等しくなるように、R G B 3 色の露光量を制御する必要がある。露光階調数を各色同一にすれば、ブラックからホワイトに至るグレー階調を各露光階調に応じて正確に表現可能である。各色の露光階調数が異なる場合、正確なグレーを表現できないケースが発生する。勿論、原理的に正確なグレーを表現できないとしても、人間の視認限度以下の精度であれば、問題にはならない。

【 0 0 7 1 】

以上説明した通り、本実施の形態に係る露光装置は、発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎に同時独立にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下するので、露光装置の信頼性が向上する。

【 0 0 7 2 】

また、本実施の形態に係る露光装置は、R 色の発光素子が n_R 個、G 色の発光素子が n_G 個、B 色の発光素子が n_B 個の合計 $(n_R + n_G + n_B)$ 個の発光素子が副走査方向に配列された有機 E L アレイを備えているので、感光材料の同一位置

を R 色で n_R 回、G 色で n_G 回、B 色で n_B 回の合計 $(n_R + n_G + n_B)$ 回露光することができる。従って、各色の発光素子について独立に m_i ($i = R, G, B$) 段階の露光階調制御が可能である場合には、各色毎に最大 n_i ($i = R, G, B$) 回多重露光すると仮定すると、R 色については $\{n_R \times (m_R - 1) + 1\}$ 階調、G 色については $\{n_G \times (m_G - 1) + 1\}$ 階調、B 色については $\{n_B \times (m_B - 1) + 1\}$ 階調の露光量制御が可能となる。RGB 各色毎に多重露光すると仮定すると、 $\{n_R \times (m_R - 1) + 1\} \cdot \{n_G \times (m_G - 1) + 1\} \cdot \{n_B \times (m_B - 1) + 1\}$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、RGB 3 色毎に 1 回ずつ露光する従来の露光装置と比べて、各色毎の露光階調数及び発色発現数が飛躍的に増大する。これにより多彩且つ超高精細な色再現、高画質化を達成することができる。

【 0 0 7 3 】

また、階調数を一定とした場合にも、発光素子やこの発光素子を駆動する駆動回路の応答速度の限界を超えて、副走査速度を向上することができる。一方、副走査速度を一定とした場合にも、各発光素子の発光強度を低減できるので、露光装置の信頼性を向上することができる。

【 0 0 7 4 】

更に、面積階調ではなく、露光量を制御する露光階調を採用しているので、空間分解能を犠牲にすることなく、発色発現数を増加させることができる。

【 0 0 7 5 】

(第 3 の実施の形態)

本実施の形態に係る露光装置は、有機 EL アレイ 2 0 の発光素子の配列を変更すると共に、駆動回路を基板上に形成した以外は第 1 の実施の形態と同様の構成であるため、同じ構成部分に付いては説明を省略し、相違点である発光素子の配列と駆動回路の配置、及び露光方法について説明する。

【 0 0 7 6 】

[発光素子の配列]

基板 1 0 上に形成された有機 EL アレイ 2 0 は、図 9 に示すように、R 色の発光素子 2 5 R を配列した R 領域 2 8 R と、G 色の発光素子 2 5 G を配列した G 領

域 2 8 G 及び B 色の発光素子 2 5 B を配列した B 領域 2 8 B を合わせた G B 領域と、から構成されている。R 領域及び G B 領域の各々において、各発光素子の配置は単純マトリックス配置とされている。

【 0 0 7 7 】

また、基板 1 0 上には、R 領域の単純マトリックスを駆動するために、陰極用駆動回路 rowIC-R 及び陽極用駆動回路 columnIC-R が、G B 領域の単純マトリックスを駆動するために、陰極用駆動回路 rowIC-GB 及び陽極用駆動回路 columnIC-GB が、各々発光素子が形成された領域を取り囲むように設けられている。

【 0 0 7 8 】

R 領域及び G B 領域の各々は、これら駆動回路により同時独立にパッシブ・マトリックス駆動（デュアル・スキヤン）される。パッシブ・マトリックス駆動とは、各陰極ラインを時分割線順次走査し、走査中の陰極ラインと交差する陽極ラインを信号に発光させたい信号に応じて駆動して、走査を全陰極線に順次行き渡らせる駆動方法である。

【 0 0 7 9 】

発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下する。発光素子群を 2 つの領域に分割する場合には、各発光素子の駆動デューティが 2 倍に向上し、ピーク発光強度が半減する。これにより、信頼性が向上する。

【 0 0 8 0 】

図 1 0 に示すように、R 領域 2 8 R では、略六角形状の発光素子 2 5 R が主走査方向に所定間隔で複数個配列されて素子列 R を構成すると共に、同数の発光素子 2 5 R がこの素子列 R から主走査方向に所定間隔ずらして配置されて素子列 R' を構成している。この素子列 R 及び素子列 R' が複数 (n_R) 行ずつ副走査方向に交互に配列されて、多数の発光素子 2 5 R がいわゆる千鳥状に配置されている。発光素子を千鳥状に配置することで、素子列 R の発光素子による露光スポット間を、素子列 R' の発光素子により露光することができる。

【 0 0 8 1 】

同様に、G領域28Gには発光素子25Gが主走査方向に所定間隔で複数個配列された素子列G、G'が複数(n_G)行ずつ副走査方向に交互に配列され、B領域28Bには発光素子25Bが主走査方向に所定間隔で複数個配列された素子列B、B'が複数(n_B)行ずつ副走査方向に交互に配列されている。

【0082】

上述した通り、感光材料40としてハロゲン化銀感光材料を使用する場合には、低感度のR色の発光素子の配列行数 n_R を、他色の発光素子の配列行数 n_G 、 n_B よりも大きくすることにより、R色の発光素子1個当りの発光強度(時間平均)を低減でき、信頼性が向上する。

【0083】

図11は図10の部分Aの拡大図である。図11に示すように、隣接する素子列R、素子列R'は1本の陰極ライン(金属電極23のライン)上に形成されている。即ち、2列で1組の素子列が1本の陰極ライン上に形成され、1本の陰極ラインで駆動される。これにより、各列毎に1本の陰極ラインを割り当てる場合と比較して、陰極ラインの本数を半分に低減でき、駆動回路及び制御回路を単純化することができる。

【0084】

例えば、図9では、R領域に、発光素子25Rが1920個配列された素子列R、R'を32組64行配列すると共に、GB領域に、発光素子25Gが1920個配列された素子列G、G'を16組32行と、発光素子25Bが1920個配列された素子列B、B'を16組32行配列している。この場合、副走査方向には、R色の発光素子が32個、G色の発光素子が16個、B色の発光素子が16個の合計64個の発光素子が配列されることになる。

【0085】

なお、この例では、赤色の発光素子25Rの配列行数を、緑色の発光素子25Gの配列行数や青色の発光素子25Bの配列行数よりも多くしたが、必ずしも赤色の発光素子25Rの配列行数を多くする必要はない。但し、赤色の発光素子25Rの配列行数を多くすることで、赤色の発光素子25Rのピーク発光強度を低減することができる。

【 0 0 8 6 】

この場合、R領域の発光素子25Rを駆動するには、32本の陰極ラインと3840本の陽極ラインとが必要になる。図9では、32本の陰極ラインは、1個の32チャンネルの陰極用駆動回路row IC-Rにより駆動され、3840本の陽極ラインは、並列に配置してカスケード接続された8個の480チャンネルの陽極用駆動回路column IC-Rにより駆動される。

【 0 0 8 7 】

同様に、GB領域の発光素子25G及び発光素子25Bを駆動するには、32本の陰極ラインと3840本の陽極ラインとが必要になる。なお、R領域の陽極ラインとGB領域の陽極ラインとは各々独立である。図9では、R領域と同様に、32本の陰極ラインは、1個の32チャンネルの陰極用駆動回路row IC-GBにより駆動され、3840本の陽極ラインは、カスケード接続された8個の480チャンネルの陽極用駆動回路column IC-GBにより駆動される。

【 0 0 8 8 】

なお、駆動回路の割り付け方法は、上記の方法には限定されない。例えば、R領域の32本の陰極ラインとGB領域の32本の陰極ラインとを、デュアルスキキャンが可能な1個の64チャンネルの陰極用駆動回路により駆動することができる。また、3840本の陽極ラインを駆動するのに、8個の480チャンネルの陽極用駆動回路の代わりに、10個の384チャンネルの陽極用駆動回路又は1個の3840チャンネルの陽極用駆動回路を用いることもできる。

〔多階調露光方法〕

次に、上記の露光装置を用いて感光材料を多階調で露光する露光方法について説明する。

【 0 0 8 9 】

感光材料40が搬送されるのに伴い、有機ELアレイ20の発光素子25R、25G、及び25Bの各々が所定のタイミングで点灯され、副走査方向に配列されたRGB3色の発光素子により感光材料40の同一位置が露光（多重露光）される。例えば、図9に示す素子配列では、R色に発光する発光素子25Rで32回、G色に発光する発光素子25Gで16回、及びB色に発光する発光素子25

Bで16回の合計64回の多重露光がなされる。

【0090】

各色の発光素子について独立に m_i ($i = R, G, B$) 段階の露光階調制御が可能である場合には、各色毎に最大 n_i ($i = R, G, B$) 回多重露光すると仮定すると、各色毎にシャドウからハイライトまでを $\{n_i \times (m_i - 1) + 1\}$ 段階で表した階調での露光量制御が可能となる。上記の通り、 n_i の値はRGB 3色について同じ値とはならないが、 m_i の値はRGB 3色について同じ値でも良く、異なる値でも良い。

【0091】

例えば、図12に示すように、1回の露光で256段階（7ビット）の露光階調制御が可能なR色の発光素子25Rで32回露光し、1回の露光で256段階（8ビット）の露光階調制御が可能なG色の発光素子25Gで16回露光し、1回の露光で256段階（8ビット）の露光階調制御が可能なB色の発光素子25Bで16回露光するので、R色については4065階調、B色については4081階調、B色については4081階調の露光量制御が可能となり、 $4065 \times 4081 \times 4081 = 67700790465$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、この場合には、RGB 3色毎に1回ずつ露光する従来の露光装置の約4037倍もの発色発現数を実現することができる。

【0092】

以上説明した通り、本実施の形態に係る露光装置は、発光素子群を複数の領域に分割して、各領域毎に同時独立にパッシブ・マトリックス駆動することにより、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合と比較すると、各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下するので、露光装置の信頼性が向上する。

【0093】

特に、本実施の形態では、感度がR色、G色、B色の順に高くなる感光材料を使用する場合に、発光素子群を、最も低感度のR色の発光素子を配列したR領域と、G色及びB色の発光素子を配列したGB領域とに分割して、各領域毎に同時独立にパッシブ・マトリックス駆動することにより、R色の発光素子のピーク発

光強度を低減でき、露光装置の信頼性が更に向上する。

【 0 0 9 4 】

また、本実施の形態に係る露光装置は、第 2 の実施の形態と同様に、R 色の発光素子が n_R 個、G 色の発光素子が n_G 個、B 色の発光素子が n_B 個の合計 ($n_R + n_G + n_B$) 個の発光素子が副走査方向に配列された有機 EL アレイを備えているので、RGB 各色毎に多重露光する場合、 $\{n_R \times (m_R - 1) + 1\} \cdot \{n_G \times (m_G - 1) + 1\} \cdot \{n_B \times (m_B - 1) + 1\}$ 通りのフルカラーの発色発現が可能になる。即ち、RGB 3 色毎に 1 回ずつ露光する従来の露光装置と比べて、各色毎の露光階調数及び発色発現数が飛躍的に増大する。これにより多彩且つ超高精細な色再現、高画質化を達成することができる。

【 0 0 9 5 】

また、階調数を一定とした場合にも、発光素子やこの発光素子を駆動する駆動回路の応答速度の限界を超えて、副走査速度を向上することができる。一方、副走査速度を一定とした場合にも、各発光素子の発光強度を低減できるので、露光装置の信頼性を向上することができる。

【 0 0 9 6 】

更に、面積階調ではなく、露光量を制御する露光階調を採用しているので、空間分解能を犠牲にすることなく、発色発現数を増加させることができる。

【 0 0 9 7 】

なお、この例では、有機 EL アレイを R 色の発光素子を配列した R 領域と、G 色及び B 色の発光素子を配列した GB 領域とに分けたが、R 色の発光素子及び G 色の発光素子の一部を配列した RG 領域と、G 色の発光素子の残りの部分及び B 色の発光素子を配列した GB 領域と、に分けることもできる。例えば、R 色の素子列 6 4 行と G 色の素子列 1 6 行とを配列した領域と、残り 1 6 行の G 色の素子列と B 色の素子列 3 2 行とを配列したもう 1 つの領域と、に分けることができる。

【 0 0 9 8 】

また、大サイズの露光が可能な露光装置を実現するために、R 領域と GB 領域とを備えた上記の露光ブロックを同一基板上に複数形成してもよい。例えば、図

13に示すように、基板10上に2つの露光ブロック BR_1 、 BR_2 を各ブロックが相互に向き合うように主走査方向に並べて配置する。

【0099】

即ち、露光ブロック BR_1 には、R領域 $28R_1$ （R領域1）と、G領域 $28G_1$ 及びB領域 $28B_1$ を合わせたGB領域1とが設けられると共に、R領域1の単純マトリックスを駆動する陰極用駆動回路rowIC-R1及び陽極用駆動回路columnIC-R1と、GB領域1の単純マトリックスを駆動する陰極用駆動回路rowIC-GB1及び陽極用駆動回路columnIC-GB1とが、各々発光素子が形成された領域を取り囲むように設けられる。

【0100】

また、露光ブロック BR_2 についても同様に、R領域 $28R_2$ （R領域2）と、G領域 $28G_2$ 及びB領域 $28B_2$ を合わせたGB領域2とが設けられると共に、R領域2の単純マトリックスを駆動する陰極用駆動回路rowIC-R2及び陽極用駆動回路columnIC-R2と、GB領域2の単純マトリックスを駆動する陰極用駆動回路rowIC-GB2及び陽極用駆動回路columnIC-GB2とが、各々発光素子が形成された領域を取り囲むように設けられる。

【0101】

例えば、R領域1、2の各々に発光素子が主走査方向に1920個配列された素子列Rと素子列R'を交互に配列すると、R領域1、2の各々について3840本の陽極ラインが必要になる。2つの露光ブロック BR_1 、 BR_2 を合わせると7680本の陽極ラインが必要になる。即ち、主走査方向に7680チャンネルでの駆動が可能になる。なお、R領域1、R領域2、GB領域1、GB領域2の各領域について陽極ライン及び陰極ラインは各々独立である。

【0102】

以下、上記第1乃至第3の実施の形態に係る露光装置の変形例について説明する。

【0103】

上記第1の実施の形態では、複数の同色の発光素子に露光階調を割り付ける2つの方法を示し、また、第2の実施の形態では、色毎に露光階調を割り付ける2

つの方法を示したが、これらの方法を適宜組合わせて露光階調の割り付けを行うことができる。

【 0 1 0 4 】

上記第 1 乃至第 3 の実施の形態では、複数の発光点を備えた有機 E L アレイを使用する例について説明したが、発光素子は有機 E L 素子には限られない。例えば、無機 E L 素子、発光ダイオード (L E D) 、レーザダイオード (L D) 等の他の発光素子をマトリクス状に配列したアレイ光源を用いても、同様の効果を得ることができる。但し、有機 E L は、蒸着等の方法により同一基板上に多数の発光素子を形成できるので、最も好ましい発光素子である。また、アレイ光源を用いる代わりに、発光素子等の光源と光源からの光を空間的に変調するシャッター・アレイ等の空間変調素子とを組合わせて使用してもよい。

【 0 1 0 5 】

上記第 1 乃至第 3 の実施の形態では、同一基板上に R G B 3 色の発光素子をアレイ状に配置したが、R G B 3 色の発光素子を色毎に異なる基板上にアレイ状に配置してもよい。そして、R 色の発光素子を配置した R 素子アレイ部、G 色の発光素子を配置した G 素子アレイ部、及び B 色の発光素子を配置した B 素子アレイ部の 3 つのユニットを配列して使用することも可能である。また、R 色の発光素子を配置した R 素子アレイ部と、G 色及び B 色の発光素子を配置した G B 素子アレイ部の 2 つのユニットを配列して使用してもよい。

【 0 1 0 6 】

上記第 1 乃至第 3 の実施の形態では、R G B 3 色の光で感光材料を露光する例について説明したが、R G B 3 色の光で露光する露光装置には限定されない。例えば、赤外光や紫外光により感光材料を露光する露光装置にも本発明を適用することができる。また、発光色、発光スペクトルの種類も 3 種類には限定されない。

【 0 1 0 7 】

上記第 1 乃至第 3 の実施の形態では、露光階調数及び発色発現数が飛躍的に増大することを示したが、表現可能な階調領域が広くても、その階調領域全域を使用する必要は無く、その階調領域の範囲内で露光装置を運用すればよい。例えば

、図 7 に示す例では、R 色については 1 0 2 1 階調、B 色については 1 5 3 4 階調、B 色については 1 0 2 3 階調の露光量制御が可能となるが、R G B 各色について 1 0 2 1 階調分を使用してフルカラー画像を形成するように、各発光素子の発光量（発光強度×露光時間）を設定し、運用してもよい。

【 0 1 0 8 】

上記第 3 の実施の形態では、R 領域に素子列 R, R' を 3 2 組 6 4 行配列すると共に、G B 領域に素子列 G, G' を 1 6 組 3 2 行と素子列 B, B' を 1 6 組 3 2 行とを配列したが、ハロゲン化銀感光材料の R G B 各色の光に対する感度は、1 (R 色) : 1 0 (G 色) : 7 0 (B 色) である。従って、R 領域に素子列 R, R' を 7 0 組 1 4 0 行配列すると共に、G B 領域に素子列 G, G' を 7 組 1 4 行と素子列 B, B' を 1 組 2 行とを配列することにより、R G B 各色の時間平均での発光強度を略均一にして、より高い信頼性を得ることができる。また、R 領域に素子列 R, R' を 1 4 0 組 2 8 0 行配列すると共に、G B 領域に素子列 G, G' を 1 4 組 2 8 行と素子列 B, B' を 2 組 4 行とを配列しても、同様の効果を得ることができる。

【 0 1 0 9 】

更に、このように R G B 各色の時間平均での発光強度を略均一になるようにした場合であっても、R 素子、G 素子、B 素子をそれぞれ構成する有機 E L 材料の違いにより、信頼性に差異が生じる場合がある。多くの場合、同一の発光強度条件では、R 素子、B 素子、G 素子の順に信頼性が高い（駆動に伴う劣化に起因する発光強度の低下が少ない）。従って、最初から発光強度が、R 素子、B 素子、G 素子の順に高くなるように、R G B 各色の列数を設定することにより、駆動に伴う発光強度が低下する割合を略均一にすることが可能であり、更に高い信頼性を得ることができる。例えば、R 領域に素子列 R, R' を 2 8 0 組 5 6 0 行配列すると共に、G B 領域に素子列 G, G' を 1 4 組 2 8 行と素子列 B, B' を 3 組 6 行とを配列することにより、発光強度を R 素子、B 素子、G 素子の順に高くすることができ、各色に対する駆動に伴い発光強度が低下する割合を略均一にすることが可能であり、更に高い信頼性を得ることができる。

【 0 1 1 0 】

なお、本発明により実現される高露光階調数を、感光材料において忠実に再現するためには、高露光階調用の感光材料を使用することが望ましい。特に、階調表現性、階調再現性に優れるハロゲン化銀カラー感光材料が、本発明における感光材料として好適である。

【 0 1 1 1 】

【発明の効果】

本発明によれば、露光装置の信頼性が向上する、という効果を奏する。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 第 1 の実施の形態に係る露光装置の構成を示す断面図である。

【図 2】 第 1 の実施の形態に係る露光装置の有機 E L アレイの発光部（発光素子）の配列を示す平面図である。

【図 3】 露光階調の各発光素子への割付の 1 例を示す図である。

【図 4】 露光階調の各発光素子への割付の他の例を示す図である。

【図 5】 第 2 の実施の形態に係る露光装置の有機 E L アレイの発光素子の配列を示す平面図である。

【図 6】 露光階調の各色毎の割付の 1 例を示す図である。

【図 7】 露光階調の各色毎の割付の他の例を示す図である。

【図 8】 従来の露光装置の構成を示す断面図である。

【図 9】 第 3 の実施の形態に係る露光装置の有機 E L アレイの発光素子の配列と駆動回路の配置とを示す平面図である。

【図 1 0】 図 9 に示す有機 E L アレイの R 領域の発光素子の配列を示す平面図である。

【図 1 1】 図 1 0 に示す部分 A の拡大図である。

【図 1 2】 露光階調の各発光素子への割付の 1 例を示す図である。

【図 1 3】 第 3 の実施の形態に係る露光装置の変形例を示す平面図である。

【符号の説明】

1 0 透明基板

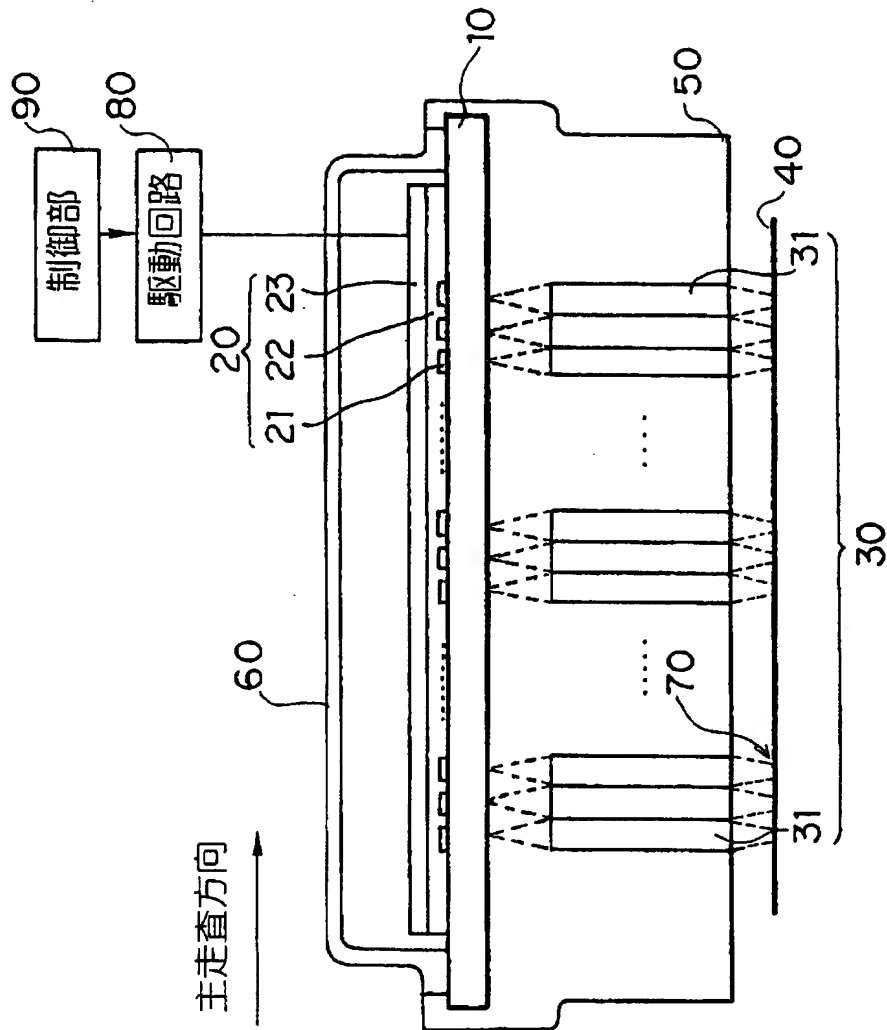
2 0 有機 E L アレイ

2 1 透明電極

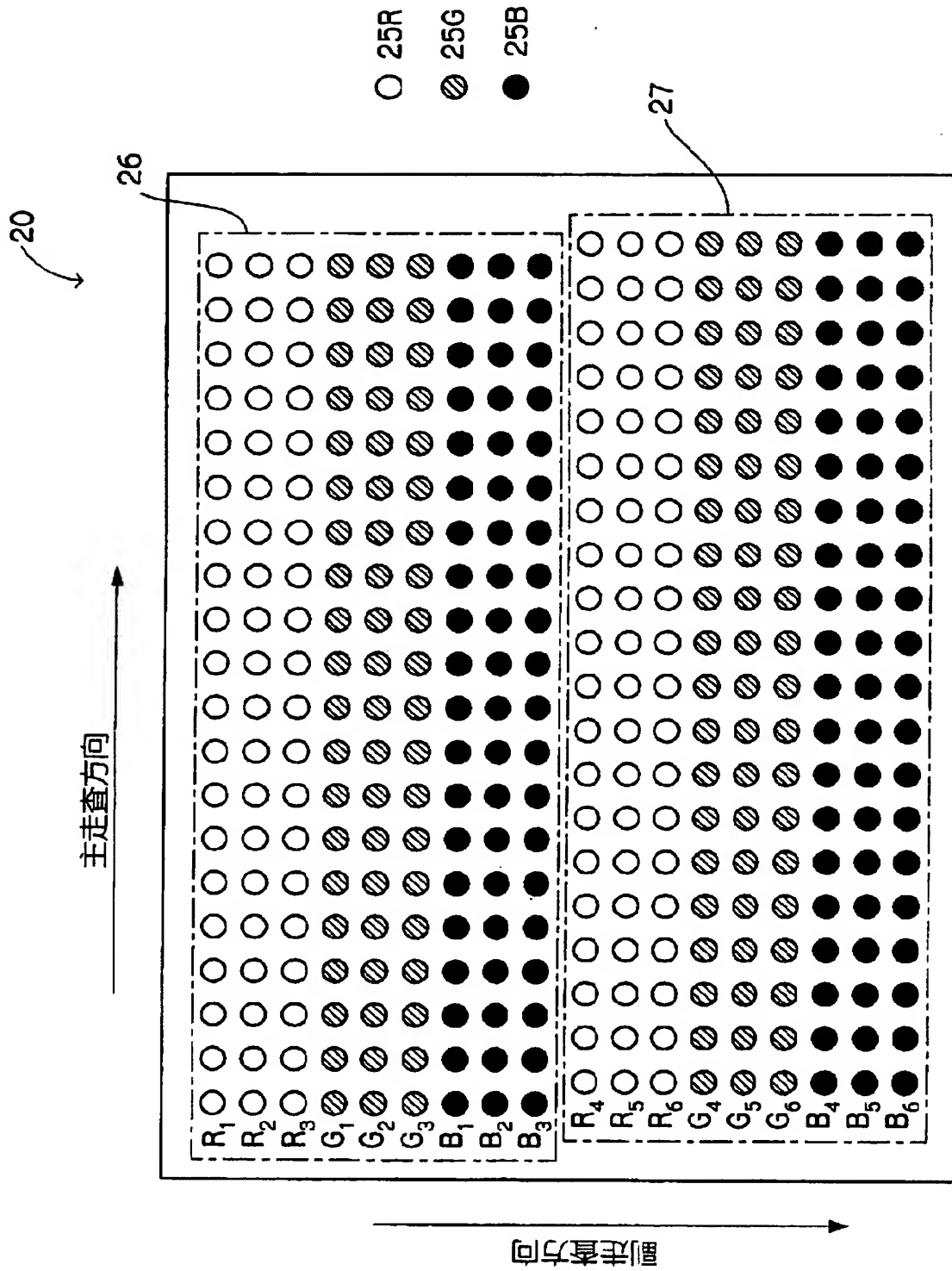
2 2 有機化合物層
2 3 金属電極
2 5 R、2 5 G、2 5 B 発光素子
2 6、2 7 A 第 1 のブロック
2 7、2 7 A 第 2 のブロック
3 0 セルフオックレンズアレイ (S L A)
3 1 セルフオックレンズ
4 0 感光材料
5 0 支持体
6 0 封止部材
7 0 露光スポット
8 0 駆動回路
9 0 制御部
2 8 R R 領域
2 8 G G 領域
2 8 B B 領域
rowIC-R 陰極用駆動回路
columnIC-R 陽極用駆動回路
rowIC-GB 陰極用駆動回路
columnIC-GB 陽極用駆動回路

【書類名】 図面

【図 1】



【図 2】



【図 3】

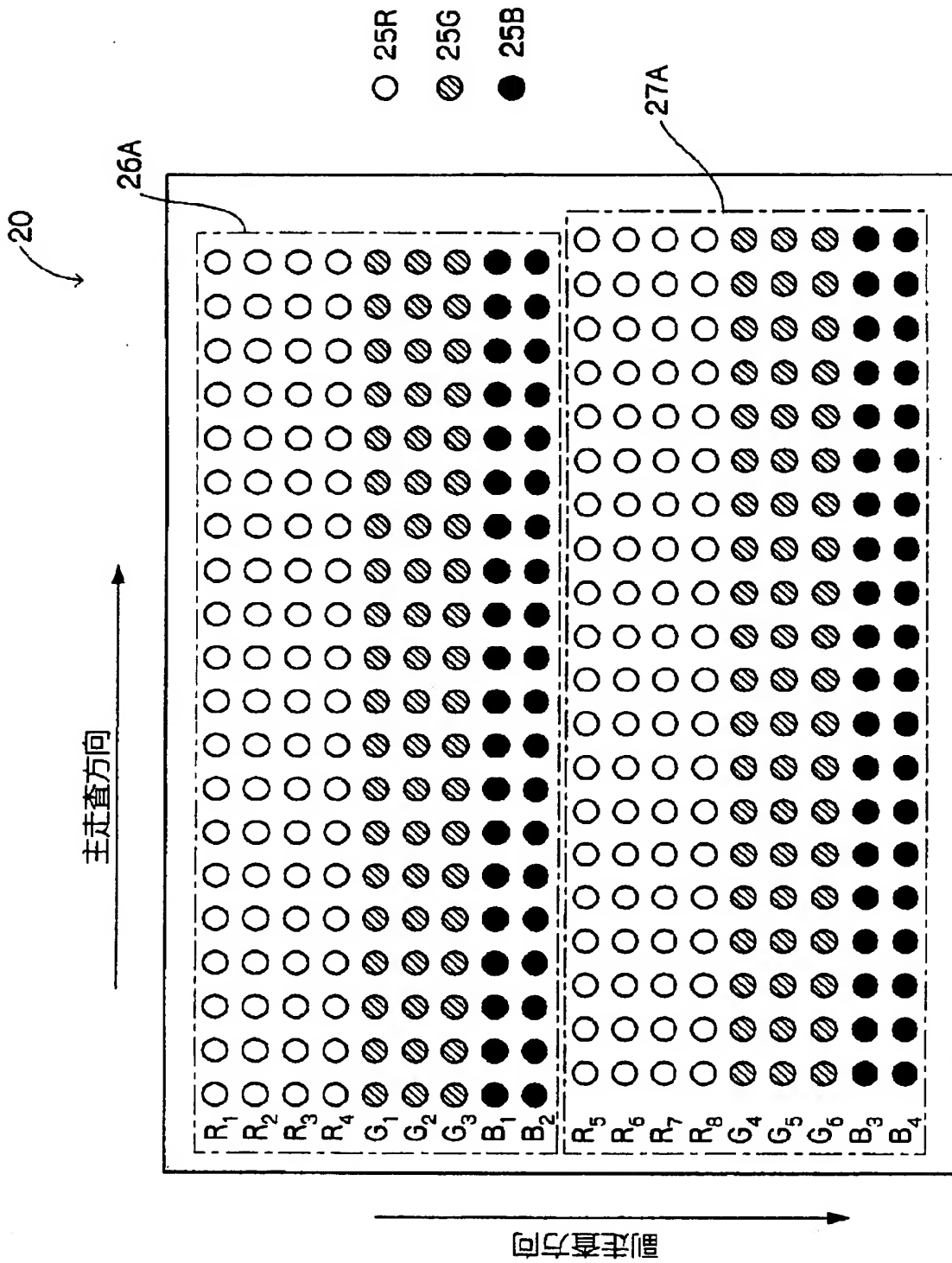
露光階調の各素子への割り付け										
	0	1	2	3	4	5	6	7	・	・
R素子1	0	1	1	1	2	2	2	3	・	・
R素子2	0	0	1	1	1	2	2	2	・	・
R素子3	0	0	0	1	1	1	2	2	・	・
									241	765
									81	255
									80	255
									80	255

【図 4】

露光階調の各素子への割り付け

	0	1	2	3	4	5	6	7	255	256	257	510	511	765
R素子1	0	1	2	3	4	5	6	7	255	255	255	255	255	255
R素子2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	255	255	255
R素子3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	255

【图 5】



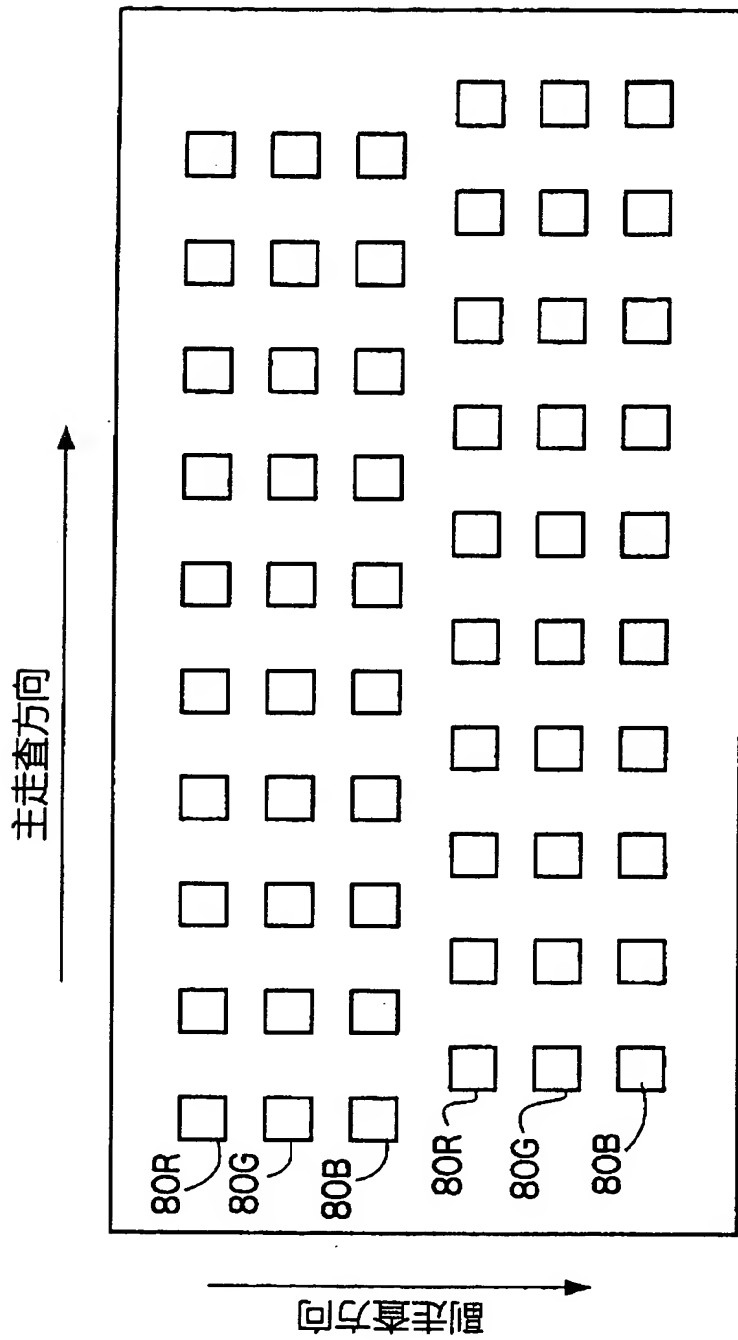
【図 6】

	ni	mi	$ni \times (mi - 1) + 1$
R	4	256	1021
G	3	341	1021
B	2	511	1021

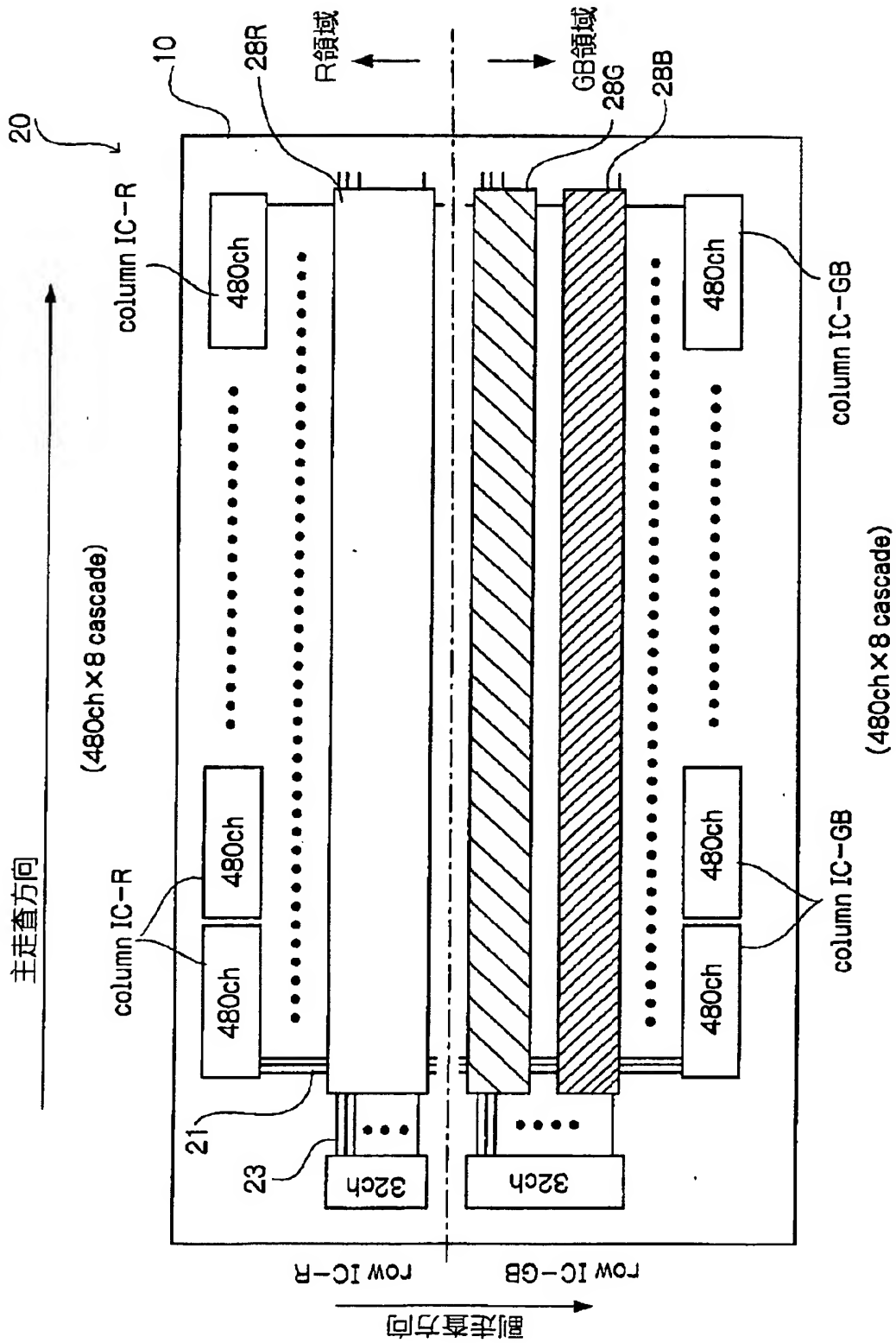
【図 7】

	ni	mi	$ni \times (mi - 1) + 1$
R	4	256	1021
G	3	512	1534
B	2	512	1023

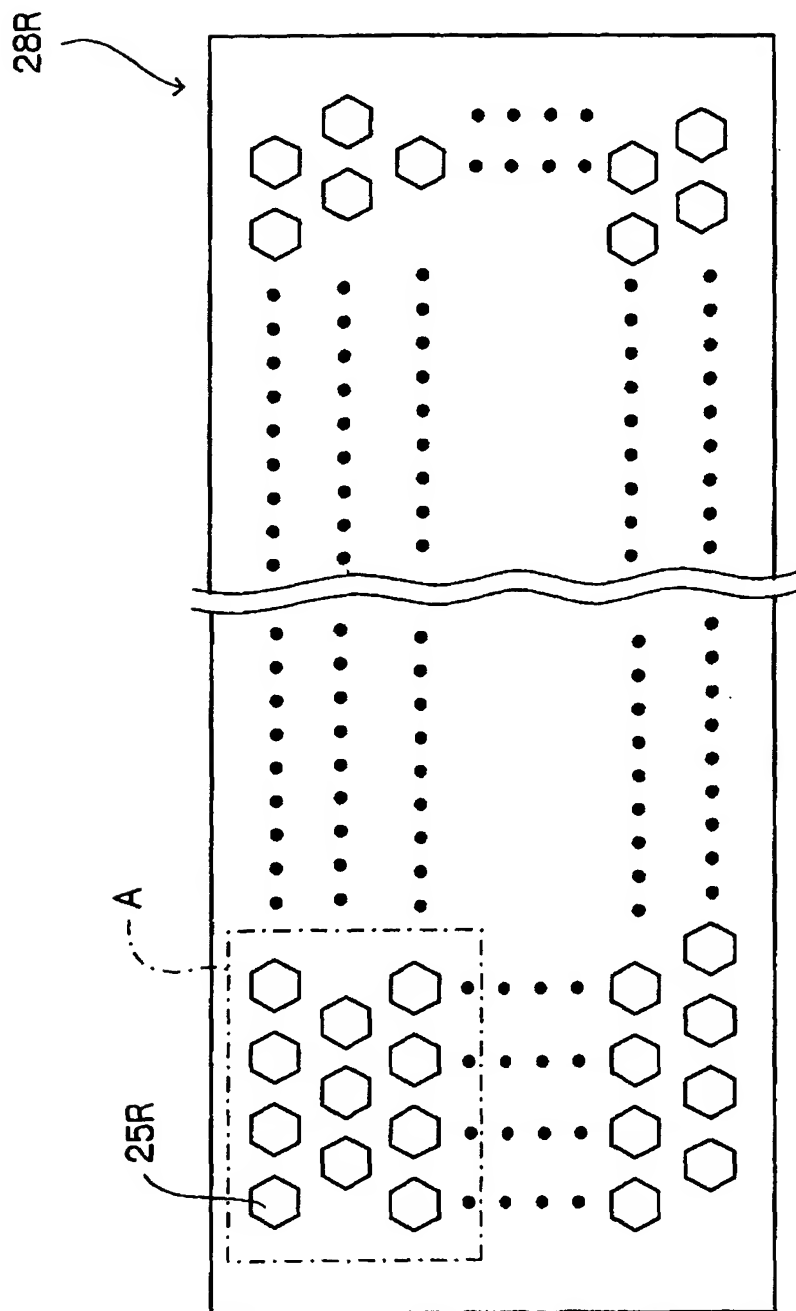
【图 8】



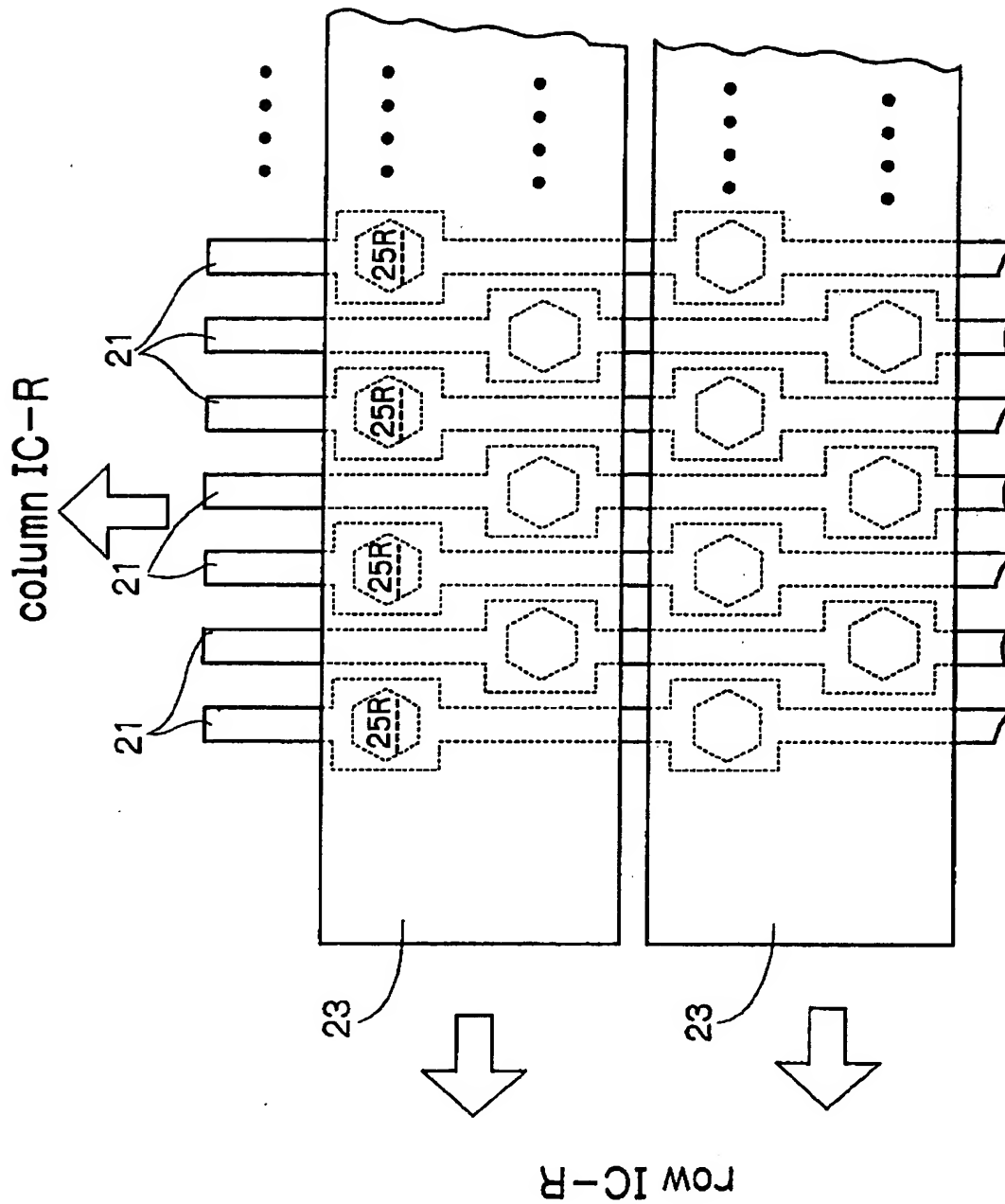
【図 9】



【図10】



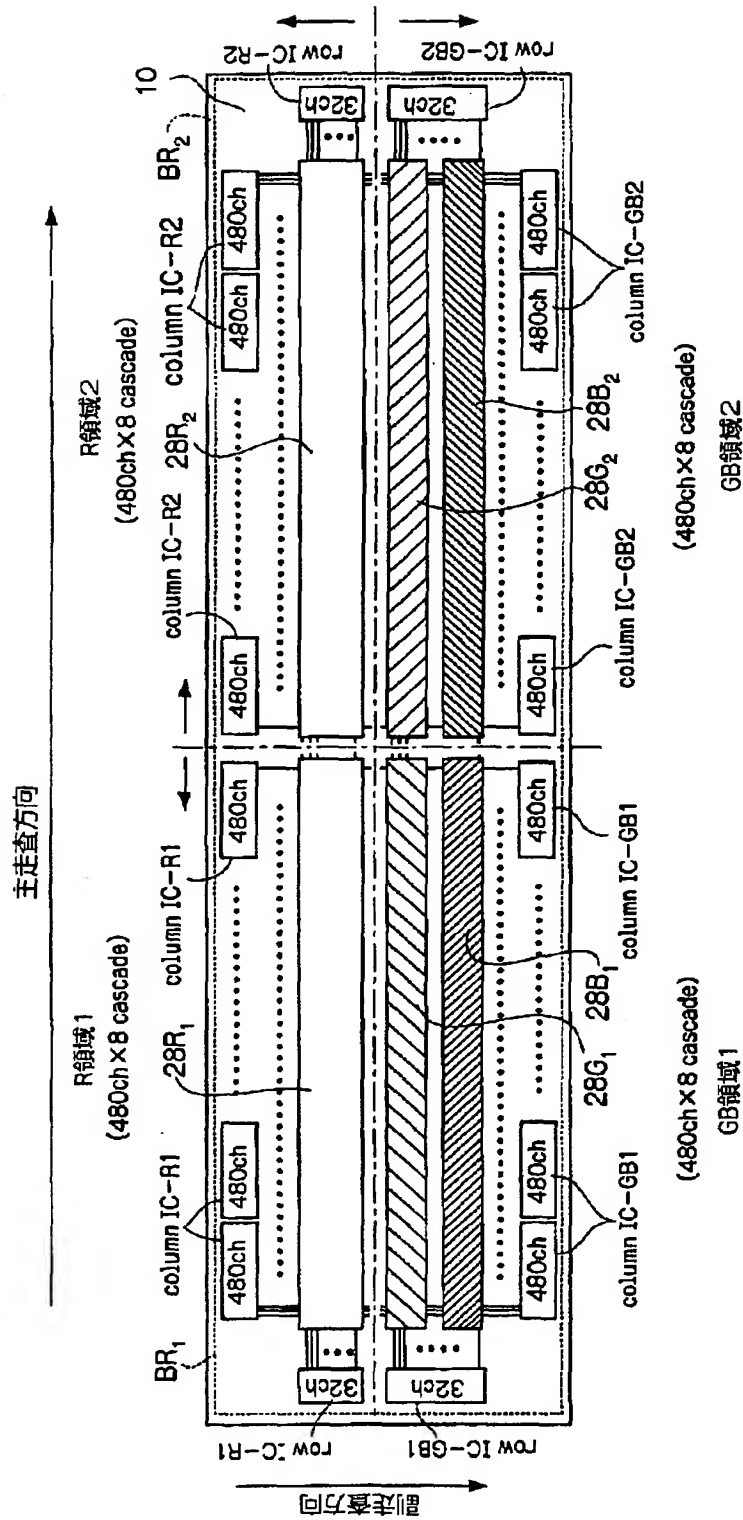
【図 1 1】



【図 1 2】

	ni	mi	$ni \times (mi - 1) + 1$
R	32	128	4065
G	16	256	4081
B	16	256	4081

【図 13】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 信頼性に優れた露光装置を提供する。

【解決手段】 R 色の発光素子が形成された R 領域及び G 色及び B 色の発光素子が形成された G B 領域の各々を、対応する駆動回路により同時独立にパッシブ・マトリックス駆動することで、発光素子群全体をパッシブ・マトリックス駆動する場合よりも各発光素子の駆動デューティが向上し、ピーク発光強度が低下する。これにより、信頼性が向上する。

【選択図】 図 9

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000005201]

1. 変更年月日	1990年 8月14日
[変更理由]	新規登録
住 所	神奈川県南足柄市中沼210番地
氏 名	富士写真フイルム株式会社